〔大会記録〕パネルディスカッション

文学研究は「京都」に学べるか

中本　大

二〇〇九年、立命館大学文学部に設立された「京都学プログラム（現・京都学専攻）」に日本文学専攻より移籍した際、自ら課したテーマの一つが、「文学」研究に「京都学」的視点を盛り込むことの意義を見極めることであった。更に付け加えれば、「文学」は「学際研究」の主軸となり得ることを確認したい、などという壮大なことも考えていた。実際、歴史学研究者が文学研究の動向に冷淡なことはよく分かっていた。それを踏まえて、積極的に歴史地理学の手法を学ぶことに努めた。多彩な研究対象や方法論を許容する歴史地理学という領域――たとえば千田稔氏の研究に代表されるような――の寛容さは、「京都」を端緒とした地域研究を通して、文学作品に興味を抱く学生を見出す可能性を十分確信させるものであった。ただし、そのための「見せ方」が難しいであろうことは十分に予測できた。

「京都学プログラム」で担当した授業は、すべてにおいて実績に基づかない実験的な取り組みであった。

例えば『大鏡』。近年、大江匡房の関与や筑紫文化圏成立説が提起される歴史物語の代表的作品を一読して、京都の地名があまりにも詳細に記されていることに気付く人は決して多くないであろう。実際、「小一条の南、勘解由小路には、石畳をぞせられたりしが」（藤原忠平伝）や「中宮権大夫殿の御座します四条の坊門と西洞院とは宮近きぞかし」（小一条院伝）といった表現は、作中、枚挙に遑ないほどで、あたかも平安京図を掲げ、地点を指し示しながら解説しているような印象を与えるほどなのである。

あまりに一般化することは避けるものの、京都の地理を悉知している人が京都の地名に詳しい人を対象にした場合、省略しても差し支えない部分を丁寧に記述している、と見做すことは許されるであろう。『大鏡』が京都以外の土地で成立した可能性は、こうした点を糸口にも考察し得るのである。つまり、「京都」に注目することで、作品内部に隠匿された「作者」の実像や成立の背景に迫り得る可能性は皆無ではないとも考えられるのである。

別の例もある。鴨長明の歌学書『無名抄』。その成立事情は必ずしも明瞭ではないものの、その背景の一つが長明の鎌倉下向と源実朝への謁見にあったことは認められる所であろう。作中に連ねられた京都史跡案内は、まさに「元祖京都ガイドブック」と言

えるものであるものの、それはまだ見ぬ京都の風景に憧れる関東の将軍に対する京都人・長明の心遣いであったと考えられる。結局、長明は実朝と昵懇になることなく帰京、『方丈記』ではあたかも鎌倉下向の事実などなかったように、京都での日常生活を淡々と書き記すのであるが、実は京都生まれの長明の優越感あふれる京都案内に、実朝が反発したのだ、という可能性は考えられないであろうか。実朝にとって心惹かれたのは貫之の旧宅や業平の古蹟を知ることなどではなく、時空を超えた和歌作者との語らいだったのである。

『無名抄』の存在は、「鎌倉」という都市の出現が、それまで唯一無二の存在であった首都京都の優位性を揺るがせ、その存在意義の再考を迫る契機となったことを明らかにしているとも考えられるのである。よく知られているように、『古今和歌集』以来の勅撰和歌集は京都の歌枕に冷淡である。伝統的な和歌世界では、春の訪れは吉野山に降りしきる雪によって裏切られ、若菜は春日野で摘むものなのである。三島由紀夫が『日本文学小史』で述べるように、和歌による文化の中央集権を目指した紀貫之が、殊更京都を詠じる必要がなかったことは、『源氏物語』が京都を舞台とすることに何ら説明を要さないことと同意であった。その図式を崩したのが鎌倉の出現である。鎌倉に対抗するため、後鳥羽院は敢えて、最勝四天王院障子絵で山城国を中心に据えざるを得なかったのである（村尾誠一「南都復興と和歌」・岩波書店「文学」第十一巻一号）。

「京都」とは、かくも相対的な存在になってしまったのであった。鎌倉が京都の対立軸として人々の記憶にくっきりと存在していた南北朝期、『徒然草』という優れた比較都市論が生まれたのはある意味必然であった。そして室町幕府開府後、平安時代以来の一極集中都市となった京都の人々に『徒然草』が冷遇されたのは、京・鎌倉を知り尽くした兼好法師の視点を再現する必要がなくなったことと無関係ではあるまい。再び「江戸」という対立軸が生まれて以降、『徒然草』がもてはやされたことの一端には、作品における比較都市論的視点の再評価が関連していると考えられるのは興味深い。

近世において「江戸」の存在は、「京都」のあり方を常に揺るがし続けた。江戸を表す「東都」という呼称は、翻って京都を「西都」と称することを許容する素地を作った。首都京都のみに許された「皇州」「皇都」という呼称――これらは決して歴史資料に現れることなく、もっぱら文学作品のみに見られるものであるが――も「京都」という都市を歴史的文脈でのみ限定して捉えるため、意図的に用いられたのだとしたら、京都の移ろいやすい価値観を表象する重要な語彙であることを確認すべきであろう。

近代に入り、「古都」イメージに呪縛された京都は、二度と首都「東京」を脅かすことのない存在へと押し遣られる。それを後押しした一人が川端康成で、誤解を恐れずに言うならば、彼は京都を歴史的文脈にのみ閉じ込めることを是とした。その代表作「古都」は現代における京都イメージの形成に大きく寄与した一

方、「古都」としての京都像に対する京都市民の蟠りを諦観へと変化させる契機ともなった。かくして京都の比較対象は「古都」を冠する奈良や鎌倉になったのである。

今後、都市としての「京都」はどのような道を進むのであろうか、否、進むべきなのであろうか。その行く末を考えるとき、文学研究が端緒となる可能性は十分にある、ということを明記しておきたい。

（なかもと・だい　本学教授）